

# 琉球大学学術リポジトリ

特別な支援を必要とする子どもたちの発達と「生きるかたち」 —発達障害を発達的に捉えるために—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜田, 寿美男, Hamada, Sumio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5962">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5962</a>

## 実践支援セミナー資料

平成19年8月4日(土)

# 特別な支援を必要とする子どもたちの発達の理解と 実践トータル支援活動 基調講演 浜田寿美男氏

## 特別な支援を必要とする子どもたちの発達と「生きるかたち」

### — 発達障害を発達的に捉えるために —

#### <京都の発達研究会について>

発達研究会は始まったのがだいぶ前なんです。私が20代の後半でした。私が60になりますので、30年余りやっている。よくやってるなあというふうに思うんですが、あまりきっちりした集まりじゃなくて、規約とかもちろんありませんし、呼びかけだけして集まりたい人だけ集まる。それで発表者は事務局の方でひいひい言いながら誰かを決める。こういうかたちでやってますので、お互い誰かも名乗らない。だから一見さんで入っても誰かわからないという状態で進めてきました。そういう集まりがよく続いたなあというふうに思っております。オールドメンバーがそのまま残っているということで、もちろん若い人たちも一緒にやっていただいていますので、本当にありがたいなと思います。そういう御縁でこちらに載せていただくということにもなって、ここでどういふことをお互い共有し合えるのかなと思いつつながらこの場所にいます。

#### <“発達障害”とは何か>

最近、“発達障害”ということが盛んに言われているのですが、“発達障害”は、はたして発達的に考えられているのか、というところを考えてみたいと思っています。つまり“発達障害”という以上

は、名前の上では発達を考えているはずだというふうに思われると思うんですが、けどどうも“発達障害”が発達的に考えられていないという感じを大変強く持っています。なぜかという、発達のという言葉自身がどういうことなのかということ、あまり私たちの中でうまく理解されていないのかなという気がして、あえて最近では発達的に考えるという言い方ではなくて、形成的に考えるという言い方をしています。ちょっと言い方を変えると違う視点が見えてくるかなあと思って、形成ということにすごく自分の中でこだわっています。

発達障害を発達的に考える。言い換えれば形成的に考える。いろいろ私たちが困る。関わっていて、ここがこうなったら楽なのになあということがいろいろ出てくる。いわゆる症状とか障害と呼ばれたりしますけれども、それを単にその脳の中のある一部が損なわれているのでそれがうまくいかないんだというかたちで、脳の部位と症状あるいは障害を1対1の対応で考えるような発想じゃなくて、症状・障害が形成されてきたものだと考える。1対1の対応で脳メカニズムと対応するほど簡単なものじゃないということです。

定型発達という話も先ほど出しましたけれども、定型発達という言い方をしたときに、すでにもう発達論を離れてしまっているんじゃないかっていう気が私はします。ひとつの決まった流れにみた

いなものがあるって、それをたどることが正常な、まともな人間に育っていく道筋なんだというようなニュアンスをどこかで持ってしまうている。定型発達と呼ばれている、つまり問題を周りからは指摘されないような子どもたち、あるいは大人たち、いずれもやはり形成はされてきている。その形成されてきているという視点で改めて見直してみる必要があるんじゃないかと思っています。

### <形成的に見るとということ>

発達研は30年ほどやってきているということになりますが、その中で私たちが共有してきたこと、それはあえて言葉にはしてこなかったですけども、おそらく発達の的のものを見ようということだったと思うんですね。今言い換えた言い方ですと、形成的に見ていくということだと思えます。ですから私たちは、必ず症例を軸にして議論するということをやってきました。だから人間の現象としていろいろな現象があるわけです。障害という現象もあれば、そういう形で指摘されない現象もあります。それをすべて形成的に見ていく。

どういうことなのかというと、基本は人間の現象をとにかく見つめるという作業です。その見つめるときに、見つめ方があるだろうと思うんです。それが形成的ということになるんですが、例えば、私たち、子どもを見つめる側の大人たちは、いわばできあがってしまっているわけです。生物学的にいうと完成体、完体です。完成してるといって、よっぽど立派な人格が完成したようですけども、そうではなくて、一応生き物としてはできあがってしまった。できあがってしまったところを生きていますと、できあがった状態で当たり前だと思う世界を描いてしまうんですね。

定型発達ということもそうだと思うんです。流れをたどって、もううまくいっている人を見ると、ああこうやっていっているじゃないかっていうふうに見てしまう。そういう一つの完成した姿を描いてしまう。(定型発達ということとは)そこを当たり前として考えるんだけど、形成的視点って何かというと、非常に極端に言うと、人は最初は卵だったということです。つまり受精卵からスタートしている、あらゆるすべての人間が。誰もが最

初は、母親の卵と父親の精子の合体した一つの受精卵として始まった。つまり単細胞から始まった。そこからスタートした人間が、ここまでややこしい生き物になっているんだというふうに見る。これは非常に素朴に言っているわけです。逆に言うのできあがった方から見るのではなくて、ゼロから見ていく。受精卵のところから見ていくという発想をどうとれるか。

ですから私たちが考えてきたことは、当たり前だと思っていることをいったん疑うという姿勢。そのことからスタートしないと、形成論というものは取れないということになりますね。できあがったかたちになるのが当たり前だという見方をしてしまいますと、結局そのできあがる過程を見るという話になっていかないというふうに私は思います。

### <当たり前のことを疑う～重度の子どもたちとの出会い～>

重度の子どもたちとの出会いの中で、目を開けているのに物を見ていないように見える子どもさんに会いました。目だけじゃなくて、声をかけても振り向いてくれない、抱っこすると、どうも触感が嫌なようで、できるだけ接触面を小さくしてしまう。ほとんど取り付く島もないというお子さんに会った。これはもう私たちにとってすごいショックでした。そういう子どもたちに、もっと小さい時から出会ってしかるべきだと私は思うんですけども、今の日本の学校というのは障害を持っている人と持っていない人が別学体制をとっていますから、私たちは出会う機会がなくて、僕もだから20代の後半に初めてそういう重度のお子さんに出会いました。目を開けているのに物を見ていないっていう子どもさんに会って、すごくショックだったと同時に、当時その子どもを見て僕らが言っていたのは、私たちは外の世界のとの関わりの中で生きていますから、いわば外の世界の窓を開いて生きていくわけですね。ところがその子を見ていますとね、目を開けても物を見てませんし、声をかけても振り向いてくれないし、抱っこしても抱きついてくれないというようなかたちで、世界に対する窓が開いていないというような気分

を味わわされて、じゃあどうやって窓が開いていくんだらうかっていうことを、とにかくゆっくり追っかけてみようということでもやり始めたほんとに最初の頃のケースなんです。2歳から始まったんですけども、2歳の時に全くそういう状態じゃないお子さんが、目を開けているのになぜ物を見ないんだらうかと私たちは思いました。この問いというのは誰もがそういうお子さんに会えば思うと思うんですが、目を開けているのになぜ物を見ないんだらうかという問いを立てるということは、目を開けたら物を見るのが当たり前だと思っているということなんです。そういう問いを誰もがやってしまうわけです。

ところがそのお子さんと月に2回ぐらいプレイルームでお出会って様子を見せていただく中で、最後にいつも追視の検査をしてたんですけど、赤いビニールのわかかを紐で吊るしただけのすごい単純な道具ですけど、その赤いわかかを胸元30cmほどのところに差し出したときに見るかどうかというものです。発達検査上は2、3カ月というところでしょうけれども、右に90度目で追うかどうか、左に90度追うかどうか、180度追えるかどうか、上にやって追うかどうか胸元にやって追うかどうかというところで、視野を全部目で追うかどうかというかたちのテストがわるわけなんですけれども、それを毎回試していったんです。けれども、1月2月3月4月経っても全然変わらない。親御さんもいらっしゃるんですけども、親御さんも「今日も変わりませんねえ。」というかたちで、月日が経って行きました。結局10カ月経って、2歳10カ月のときに、そのときはたまたま検査道具がなかったもので、これが良かったのかもしれないけれども、別に発達検査で発達年齢出そうというわけではないので、代わりの(もの)は何でもいいだろうと探したら、運動会に使う玉入れの赤い玉があったものだから、それでやりましょうかということになって、その子どもが仰向けになっているところで、胸元30cmのところの赤い玉を差し出したら突然見始めたんです。びっくり仰天したわけです。「見てる！」って。お母さんもびっくりした。初めて見るようになった。大騒ぎになって、右に左に動かすと目で追うわけです。上も追う下も追う。「わー！」って言って騒

いでいるうちに、赤い玉がそれたんですね、視野から。そしたら寝返りまでした。びっくり仰天したわけです。

びっくり仰天したとたんに思ったのは、どうして見るようになったんだらうということだったんです。何で見るようになったのかと考えてもわからないわけです。これはどういうきっかけでとか、どういう原因で見るようになったというのは、もちろんわからないわけです。たまたま本当にそのとき突然でしたから。それだけじゃなくて、さらに目を開けて外のものを見るというのは一体どうということなのだらうかと考えたわけです。普通あまり考えませんよね。目を開けて外のを外のものとしてみるなんていうことは、なぜなのだらうかなんて思わないわけです。当たり前すぎるから。それで、実は考えるとよくわからないんですね。

ご存じのとおり、目で物を見るというのは外の光の刺激がレンズを通して屈折して小さい光の像になったものが網膜の上に落ちる。それで網膜というのは神経細胞を張りめぐらせたものですから、そこに光の刺激が落ちることで、それが神経インパルスに変換されて視神経路を通して後頭野に行くという、こういう話なんです。そういう構造を描いたときに、それじゃあ何で人は網膜の上にも物を見ないのか。最初に受け止めているのは網膜なんです。網膜の上にちょうどテレビの受動機が張り付いているような状態ですね。見えてもよさそうに思う。なんで外に見えるんだ。外に見えるっていう根拠はどこにあるんだっていう話に、理屈の上ではなるんですね。わかりますか。こんな屁理屈ばかり言っているわけですけど。結局ね、こういう話をぐじゃぐじゃしていると、もうそれだけで時間が経ってしまうんですけども、よくわからない。よくわからんけども、私たちは目を開けて外のものを見るということをやっているわけです。

奇跡のようなことが起こっている。私たちは、その当時言っていました。これは一種の奇跡ではないか。普通奇跡というと、世の中で起こりようのないはずのことが、神の力によって起こるみたいなかたちを、奇跡って言いますけれど、そういう奇跡じゃなくて、私たちが現にやっちゃって

いる現象・行為そのものが、実は説明をしていこうとするとわからなくなる。そういう奇跡を、いわば私たちは生きている。ただし奇跡が起こらないことがある。奇跡が起こるについては条件がある。私たちの身体の支えでもって、初めて外のを外のものとして見えるという構図ができあがっているんだと思うんです。奇跡があるとすれば、奇跡を支えている何か、身体の側のメカニズムがある。身体の側のメカニズムがあるとすれば、身体っていうのは生ものですから、壊れることがある。うまく整わないことがある。とすれば、外のもものが外のものとして見えないっていうことも当然あっておかしくない。そういうものとして私たちの奇跡があるのではないかというふうに、その当時考えていました。

そういう当たり前のことをいったん疑って見ることで、現に目を開けて物を見ない子どもがいるわけですよね、その子どもがどんな世界を生きているんだろかっていうことを考えようとすれば、その子の視点に立たなきゃいけませんね。その子はじゃあどう世界を生きているかということ、わかりませんが、少なくとも私たちがこうして生きている世界とは違います。極めて重い特別な子どもだけがそういう問題を抱えているかということ、そうではなくって、私たちだって産まれて最初2、3カ月は、目を開けても見てないという目をしているときがあったわけですよね。生まれた最初は誰もが外のを外のものとして見るという状態じゃないところからスタートしているわけですね。

### <外のものに向かう力>

私たちはそれを「向かう力」という表現をしましたが、外のものに向かうっていう力は、奇跡のようだけれども整わないことがある。そういう目で見ますと、私たちは最初の頃、外のを外のものとして捉えることができない。つまり向かう力を十分持っていないところからスタートしている。やがて死ぬ時、また見ている目じゃないところに戻るんだあって思います。私、父親が死ぬ時に思いましたけれども、目が眼球になるなあということ、まだ生きているんですよ。もう

本当に亡くなる直前なんですけれども、目を明けていても目が合わないわけですね。見ている目じゃないんです。目を開けていて、見えない、外のを外のものとして見ないということが、私たちの人生の最初と最後にある。人生の最初と最後だけじゃなくて、たったこういう場所、今のような場面でもある。時々目を開けていて、見てない目になる人がいる。わかると思いますけど、先生なんかしていたら、子どもがお昼ご飯の後の耐えている顔を見ていますと、目を開けているのに見ていない目にスーッと戻っていく。あの瞬間ってなかなか面白いなあって思います。私も大学でいつも味わいながら思ってますけれど、あれはだから外のものに対する向かう力を失う瞬間なんです。言えば大仰ですけど、そういう瞬間がやっぱりあるんですね。

私たちが、その瞬間をあんまり気がつかないのはなぜかということ、普段私たちは目をつむってから眠るようにしているからなんです。ところがそういう場面だと、目を開けたまま、目を開けたかないといけないという問題意識のもとに頑張るんだけれど、意識の方が先にいったときに、手続きが逆になったものですから見てない目になる。私たちもだから日々向かう力を夜失い、また朝嫌だなと思いつつも向かう目をして起きているわけです。こういうふうに考えると、私たちが大人として当たり前だと思っているところから発想するのではなくて、ゼロから始まって、例えば向かう力っていうものも形成されてくるものだと見たときに、人間の現象をそこから立ち戻って見るという姿勢が大事じゃないかなあという気がしているわけです。

### <形成的な視点で記述することの必要性>

発達障害の問題を、ここが問題だ、あそこが問題だとかたちで症状として取り出し、それを障害として位置付けるということが行われています。確かにその子どもたちは、しんどさを持っているわけです。しんどさを持っていますから、そこを何とかしたら楽になるのになあということ私自身も思うわけですが、だけどそのことを脳の中のここがこうなっているからということ考

えるんじゃないくて、誰もがどうしようもなさを抱えているわけです。2歳10カ月まで、外のものを外のものとして見えなかった子どもってというのはそういうところを生きていたわけです。そういうふうに見ますと、発達の障害、あるいは症状というものを形成的な視点で記述するということがやっぱり必要だと思うんです。

注意とか集中力とか簡単に言ってしまうんだけど、そもそも注意って何なんだっていうことを考えないで、注意が欠けている子どもがいるという言い方は違うんじゃないかと思います。それを図地文節の共有という言い方をしたからって、何がわかったわけじゃないかもしれませんが、そういうふうに行くことで、少し違うことが見えてくる。そういうことがあるような気がしているんです。

### ＜発達の障害なのか、発達上の障害・症状の形成なのか＞

発達というものの障害なのか、発達上に何らかのハンディ・障害が形成されているのかという目で見なきゃいけない。すごい素朴な話をしますと、例えばダウン症の子どもたちが染色体の異常ですから21番目のところがトリソミーになっている。原因ははっきりしていますけれども、じゃあその子どもたちが、どういう身体を形成し、どういう精神現象を形成するようになるのかということは、あくまで形成の目で見ない限り見えてこないですよ。ダウン症という原因がはっきりしているその子どもたちが、実はその原因から出発してどういう器官形成、身体形成がなされているのか、どういう精神現象が形成されていくのかという目で見えていくことの必要性っていうことをちょっと考えればわかると思います。

例えば、発達障害と呼ばれている子どもたちも、どこに原因があるかということは、本当はよくわかっていないわけですね。注意力の障害だとADHDなんかは言われますけれども、それがそもそも一次的障害とっていいのかどうか、ということも僕は問題になっているんじゃないかと思っています。そういうふうに見ていきますと、結局その行動形成のかたち、症状形成のかたちを

私たちにどうやって記述できるかっていうことが最大の問題だということになりますし、実際のケアをしていく場合にもそういう症状形成の仕方、あるいは行動形成の仕方次第で関わり方ってやっぱり変わってくると思うんですね。

### ＜歩行世界とコミュニケーション世界～1歳代の子どもの行動形成～＞

時間がありませんので一例だけあげますと、非常に素朴な行動形成の具体例をあげさせていただきたいんですけど、すごい素朴な話なので、「なんだ」と言われるかもしれませんが、例えば歩行世界とコミュニケーション世界がありますけれども、人間の赤ちゃんは歩き始めるのとしゃべり始めるのが、ほぼ同じ時期ですよ。おおよそ1歳くらいなんです。歩行と言葉ですから全く違う領域のように見えます。もちろん機能的には違うところが担ってますので違うわけですけど、だけどこれが、ほぼ同時に出てくることで1歳代の子どもの行動形成っていうのが、楽にいくか、それともしんどくなるかということが、変わるんじゃないかということをごさぐさ描いています。

つまり片方の側が視線の能力の停滞があって、歩行が開始される。もう片方は言葉以前のコミュニケーションがさまざまにあつて、例えば声をかけ合うっていうのもそうですし、目が合うっていうのもそうですし、お互いに物を受け渡しするっていうのもそうですし、まねっこするのもそうですよ。そういうかたちの言葉以前のコミュニケーションがあつて、その上に言葉が形成されていく。つまりそれまで意味をなさなかった、これっていうかたちの特定の意味をなさなかった声のやり取りが、意味をもったかたちでやり取りされるようになるというのが1歳前後ということになるんです。

これがほぼ同じ時期に出てくるんですが、これがほぼ同じ時期に出てくることには、行動形成上意味がある。なぜかという歩行が形成されるということは、実は歩行世界が広がるということなんです。歩行っていうのは単なる移動ではない。パチンコ玉を転がしたみたいなかたちで移動する

ことを歩行とは言わない。人間にとっての歩行とは何かというと、行き帰り、往還なんです。つまり行ったら帰ってこないといけないわけです。行って帰ってくるという歩行世界をつくりあげる。行って帰ってくるということがなければ、歩行というものは全うできないはずなんですけど、行って帰ってくるということは帰る場所があるということ。あるいは行くべき最初のスタートとしてのホームがあるということです。歩行が形成されるっていうのは歩行が開始されるその時に、同時に往還の世界にそれが繋がっていくためにはホームがなければいけない。ホームって何かっていうと、基本的には自分の居場所であるわけです。それは場所である以上に人との関係です。ですからお母さんとの関係、お父さんとの関係、身の回りの人との関係の軸が片方あって、初めてホームがあるということになりますし、行き帰りということが成立するということになります。

その行き帰りがあることで、歩行の世界が安定したものになることと合わせて、実は言葉の出現の方も、なぜ言葉が出現するかというと、身の回りで言葉をしゃべる人がいれば、それをそのまま具体的に頭の中にインプットするわけじゃなくて、言葉以上にもっとコミュニケーションの段階から既に周囲の人との間の対人的な関係があって、それがベースになって言葉っていうものが成立するということになるはずなんです。そうしますとこの歩行の開始にも言葉の出現にもいずれにも、いわば対人的なホームの形成ってことがあるということなんです。それでもって初めて、私たちはこの1歳代のスタートをいわば順調に歩みだすことができるというふうになっているのです。

ところが、よくご存じのとおり自閉的な障害の子どもたちはこの時期から問題があるので、なにかという姿勢運動面での育ちが順調にいくのに、対人的な関係の部分に難しさをもってしまう。そういう偏りが出てきます。そうしますとホームが形成されていないのに歩行・運動ができるようになる。そうすると結局行きっぱなしになる。行きっぱなしになる子どもたちが少なくない。子ども連れて買い物に行くとすぐ迷子になる。迷子になったたいいの子は捜し歩いたらもう子どもはわんわん泣いて、お母さんにすがりついてくるのに、

この子どもたちは平気で普通の顔をしている。そういう状態が、結局、行動形成上の問題として出てきている。すごい些細な話ですけど、こういうことっていうのはおさえておく必要がある。

### <ほとんどの人ができていることを考える>

比喩的に聞こえるかもしれないですけども、例えば小学校1年生の子どもが与えられた机の前に座っているということはどういうことなのか、そういう行動形成は一体どうなって可能なのかというふうに考えれば、同じようにこれを注意力が散漫なので座れないんだという言い方で単純には言えないっていうことに、そういう単純な言い方では理解できないということに気付いていくのではないかと思うんです。

多くの子どもたちは座っていて、わずかな子どもたちは座れないので、何でこの子は座れていないんだろうとなりますけれども、じゃあどうして多くの子どもたちは座れているのかと、座れているのはおかしいじゃないか。おかしいじゃないかとは思わないですけど、座れる方がたぶん楽だと思えますけど、「なんでだ」と考えるとこれはその部分を見ていかなければいけないと思うんですね。発想が逆になることに気がつきますよね。できない子どもたちが、何でできないのかというのに対して、できている子どもは何でできているんだ、こういう話なんです。行動形成を記述するということはそういうことだと思うんです。

そうやってみますとね、結局、定型発達みたいな発想でしますと、定型発達からどう歪んでいるのか、どうはずれているのか、どこが足りないのかっていうかたちで、基本的に全部マイナスで考える。だけど形成の過程の中ではマイナスはないわけです。もちろん途中で事故にあったりして機能を失うことはある。育ちの過程の中で、つまり形成過程ということで見たときにマイナスはないはずなんです。全部プラス。プラスという言い方も変ですけど、何かが加わって展開していく過程っていうふうに見ていくとすれば、なぜできないのかっていう以前のところで、なぜ私たちほとんどの人はできているのかっていうので見ていくっていうことが基本ではないかと。これもう言い方を

ひっくり返しただけに聞こえるかもしれませんが、そういうことを言うことで、少し見えてくるような気がしているわけです。

### <意味世界の形成>

3枚目の図（『私』とは何か』浜田寿美男著講談社選書メチエp153、p158、p195）のところだけは、よくわからないと思いますので説明したいと思います。これは意味世界の形成っていう、これも一例としてあげているわけですが、いろんなものが身の回りにありますけれど、私たちはもう大人になっていますから、すべてのものをこれはこれだってわかって生きてるわけです。例えば今、座っているのは椅子です。足元にあるのは床ですし、手をついているのはテーブル、手に持っているものは鉛筆だったりシャープペンシルだったり、上には天井があって、蛍光灯があって、向こうにはカーテンがあって壁があって、身の回りを私たちはすべて意味で張り巡らせて生きているわけです。価値のないものはありますけど、意味のないものはない。意味って何かと言いますと、そのものに対する振舞い方です。平たく言うと、これに対してはこう振る舞えばいいっていうのをわかっているのを意味って言います。

ですからゴミにも意味がある。ゴミを見つければ、ゴミはゴミ箱にという振る舞い方を知っている。もちろんそれを無視する人もいるのでゴミを見つければ面倒なので無視するというやり方を覚えている人もいます。それも一つの振る舞い方。ごみに対する振る舞い方。そういう振る舞い方がわかっているものだから、安心して生きてるわけです。身の回りのものにはすべて意味がある。じゃあその意味の中で、生まれた最初からこれはこうだってわかっているものがあるか。産まれて初めて鉛筆を見た赤ちゃんが、鉛筆が鉛筆とわかるか。それはわかるはずがない。初めてコップを見た赤ちゃんがコップがコップだとわかるか。それはわかるはずがない。ただキラキラ光る向こうのものが少し歪んで見える透明な物質としては見えるかもしれませんが、それが、コップはビールを入れて飲むようなものだと、そういう振る舞い方を私たちは当たり前だと思っ

ていますが、赤ちゃんはそれを何だということは初めて見てわかるはずがない。最初から、これはこういうふうになる振る舞うべきものなんだとわかっているものは、ほとんどない。例えば、お母さんの乳房とか哺乳瓶とかは口にくわえさせますと吸ってくれますから、最初からそれは振る舞い方を知っていると言っていいかもしれませんが、そういうきわめて例外的なものを除けば、私たちの身の回りの物は、ほとんど人間の文化で作られたもので囲まれているわけです。したがって最初にこれはこういうものだとかわかるということはありません。そうだとすると最初これがこういうものだということが、ほとんどわからないものに囲まれたところで生まれた赤ちゃんが、やがて身の回りのものをすべて意味で張り巡らせて生きようになる。形成というかたちでいってきますと、それはどうやってできるんだということが問題になりますよね。

とりわけ自閉症の子どもたちとの付き合いの中で考えてきたことが“三項関係”というふうに名づけてきたものなんです。もともとハンス・ウェルナーっていう人の「シンボルの形成」っていう本の中で“共有状況”、シェアード・シチュエーションでしたか、そういうかたちで、人と人が何かを共有するという関係っていうのが言葉の軸として機能しているんだということを言ってますけれど、そこに根がある話なんです。

三項関係ということがこの意味世界の形成っていうことに対して極めて重要な意味を持っているのではないかということで、いろんな前提一切抜きで話をしますけれども、人は誰かと何かを一緒に見るということが出来ます。一緒に見るということが出来る生き物がどれくらいいるんだろうなあという気がしますが、サルとかチンパンジーでもあまり頻繁には見られませんが、猫とか犬とかは人と一緒に何かを見ることをやるかどうかあんまり見ないように思うんですが、人間という生き物は一緒に見るということが出来ますよね。おそらく生後5、6カ月くらいから始めることだと思います。

一緒に見るとはどういうことなのかと考えます。そうするとね、一緒に見るということがどういうことかとわかりやすいようにということで、よく



似てるけどちょっと違うものを持ってくるとわかりやすいんですけど、一緒に見るということ、同時に見るということとは違うということを図（『私』とは何か』p153）で表しています。一緒に見ると同時に見るは違う。同時に見るということは何かというと、二人の人が、ここでは母親と子どもにしていますが、母親と子どもが一つのものを見ている。だけど間に壁がある。従ってお互いがどこを見ているかはわからない。壁の上からのぞいている人があるとすれば、上からのぞいて、お母さんが物を見ているな、子どもも物を見ているなということで、同時に見ていることを確認できますけれども、こういうことを私たちは一緒に見るとは言わない。ただ、たまたま同時に見ていると言います。一緒に見るというのは、お母さんと子どもが物を見ている。見ているんだけど、そのときお母さんがその物を見ているときに、同時に子どももその物を見ているだけではなくて、子どもも見るなということをお母さんも見てる。子どもの方は自分がその物を見ているだけではなくて、お母さんがそれを見ているなということかたちでお母さんが見ることをなぞっている。

そこで、あえて図で、お母さんが物を見るのをA、子どもが物を見るのをBというふうにしましたけれども、例えばお母さんがその物をAという目で見れば、子どもは自分がそれをBという目で見ながら、お母さんはAという目で見ているなということかたちで、Aというふうに書いてますけれども、ものを見方をなぞる。まなざしを向けるという、視線をそこに向けるというだけじゃなくて、見方もなぞっている。お人形さんをそこに物として持ってくれば、お人形さんらしく見る。あるいはそのものに対してお母さんはお人形さんってわかっていますから、意味がわかっていますから、そのものらしく振る舞う。抱っこして見せたり、よしよししてみせたり、哺乳瓶をくわえさせるところを見せたりということかたちで、お人形さんにお人形さんらしく振る舞う構えを見せる。それを子どもがなぞるということかたちで。同じようにお母さんは、子どもがお人形さん初めて見て、まだお人形さんをお人形さんとして扱うことができなくて、ただ手を引っ張ったり、足を引っ張ったり、床にこすりつけたり、ふらふらさせたりするだけ、お人形

さんをまだお人形さんとして扱ってはいない、そういう振る舞い方を見て、この子はそういう楽しみ方をしているんだねっていうかたちのなぞり方をします。

そういうことからスタートして、今度はお父さんにしてみました。車を見たお父さんないしお母さんが、車だとわかりますから、一応おもちゃの車です。おもちゃの車を見ると車らしく振る舞う。車として見立てて、床を道路にして、そこを走らせる。あるいは、荷物を乗せて運ぶ。運転手さんを乗せる。そんなことをして遊びます。つまりお父さんは意味世界の中を生きているわけです。この図（『私』とは何か』p195）に表しています。お父さんは身の回りをすべて意味で張り巡らせていますから、どんなものがでてきても、そのものにふさわしい振る舞い方を、おのずとするようになっていく。そのことを子どももなぞってみるということから、最初、車はただの物体でしかなかったとしても、やがて、お父さんの振る舞い方をなぞることを通して、お父さんの意味世界、お母さんの意味世界が、自分の側に敷き写されてくる。こういう過程をたどっている。

敷き写すっていう言い方をしていますけれども、これは古いかなあという気がするんですが、私たちがいうと当たる人が少ないんですけども、皆さんの世代どうかわかりませんが、好きな絵があつてですね、自分で描けないものだから上に薄い紙をのせて、なぞって書くというのを、それを敷き写すというのであれば、お父さんお母さんの意味世界をなぞって自分の側に敷き写すということかたちで、意味世界を自分の中にくみ取っていくということが行われているわけです。これが先ほど言った図地分節の共有のようなものなんです。三項関係っていうのは別の言い方をしますと、図地分節の共有ということなんです。車をちゃんと車として意味づけて図地分節をし、その振る舞い方をしているお父さん、お母さんのありようを自分の中にくみ取っていくことで、共有の図地分節が形成されていくということになっている。このことがあつて初めて、子どもは周囲のものをすべて意味で張り巡らせて生きようになるっていうふうになっているんじゃないかと思うんですね。

ですが例えば、自閉的な障害の子どもたちが一

一番苦手なのは、一緒に見るということなんです。一緒に一つのことを経験することが極めて難しい。つまり図地共有の難しさを抱えている子どもたちです。発達心理学の理論的な言い方をしますと、ジョイント・アテンションが苦手ということになるんですが、発達研なんかでいろいろ議論している中で言葉をこう言った方が分かりやすいかなあということで、図地文節の共有と言おうと、つい最近から思っているんですが、ですから自閉的な子どもたちは図地文節の共有が難しい。結果的に何が起こるかという、意味世界を敷き写すことが難しいということになる。意味世界を敷き写すことが難しいということになると、共有の意味世界をつくれぬ部分は一体彼らにとってはどうなっているのか。鉛筆が鉛筆になる。コップがコップになる。電話帳が電話帳になる。当たり前すぎることもありませんけれども、それがうまくいかない子どもたちが現にいるということ。その子どもたちと私たちは付き合っているんだと考えた時に、その意味形成の問題として自閉症の子どもたちの世界の記述っていうことができるんじゃないかなっていうふうに思うわけです。そこを大変に苦労している。苦労しているのは現場の人たちであって、私は横からちゃらちゃら言っているだけであんまりやってないんですけれども、ある意味でちょっと無責任な立場の人間かなあと思いがら、だけど整理するのが自分の仕事というふうにしてやってるんですけれども。

そういうふうに見ていくと、例えば自閉の子どもたちの意味世界ってというのが、ひょっとしたら意味で埋まっていないところがあるかもしれない。私たちは全部敷き写してしまっていますから、周りの人たちとほぼ共有の意味世界を生きているわけです。けれど彼らはひょっとすると埋めきれない、いわば無意味の世界を、無意味の海の上にくっつか意味が通じるものが島のように浮いている世界を生きているかもしれない。無意味の海の中にくっつか意味の島が浮いている。しかもその意味の島も周りの人たちと共有できるものだとは限らない。例えば朝から晩まで電話帳めくっている子がいるとする。電話帳ってというのは電話の番号を調べるためのものなんですけれども、彼にとっては独特の感触とか、空気の動きとかっていうこ

とを楽しんでいるように見える。そのことが彼にとっては、そういう意味を持っているかもしれませんが、周りの人は共有できないわけです。

無意味の海の上にくっつかの島があって、その島の中にももちろん共有されているものもあります。例えば食事なんかの場面は、なんだかんだ言って食べないと生きていけませんから、食事の場面は共有してますし、そこところで共通の意味を持っているっていうことが当然ある。無意味の海の上に意味の島って言い方をしますと、あまりにも無意味のところが多すぎるイメージを持ちますけれども、その広がり方がどこまでかともかくとして、そういう状態だと考えれば、彼らがじゃあ、無意味なものに出会ったとき、どういうふるまいをするのか。意味が見定まらないものっていうのはすごい捉えどころがない。

先ほどその知覚過敏、聴覚過敏の話をしましたけれども、自閉症の子どもたちは知覚過敏があると言われたりします。だけど知覚過敏という言い方をする以前のところで、つまりほんとに刺激が大きく受け取られすぎるっていうことなのか、それとも別の要因なのかと考えたときに、知覚過敏という言い方は過度にそれを大きくとらえてしまうということに聞こえますけれども、そうじゃない可能生もある。つまり意味を見定めることができないうために、そのことを脅威として感じている。

図地っていう話でこないだ発達研の飲み会で話題になった話を一つ上げますと、別に目の世界も図地分節ですし、耳の世界も図地文節、触ってみるのも図地文節。だから今私たちが下着をはいているとすれば、下着が触れているのが、触覚だと思わなくてはならないけれども、だけどほとんど意識してませんよね。身体に触れているものってというのは、ほとんど意識していない。地に沈めているわけです。ところが寝るときにパジャマの首のところがきつかったりすると、そこが浮き立ってしまって、とにかく寝苦しいっていうことがありますけれども、その時は触覚が図になっている。

話題になった話というのが、キャベツを食べる時に、実はキャベツを口でほおばって食べますとね、すごい音がしている。耳栓をしてキャベツを食べますと、どれくらい大きい音がしているか

といったら、驚くほどの音がしている。みんなでキャベツを食べながら、耳をふさいですごい音をするなあと改めて感激をしていただきました。私はたまたま外耳炎があったときに、両耳の穴がふさがってしまって、食事をしたりする場面で、とにかく口の中ですごい音がしてるなあって気づいたのが初めてで、キャベツを食べる場合もそうです。キャベツを食べる時に耳栓をするとすごい音がしている。耳栓をはずしても実は音がしているはずなんです。耳栓外したらキャベツの音が減るわけじゃない。ところが耳栓を外したとたんに、キャベツのものすごいバリバリという音が、背景に沈む。外の世界が前景に出る。そうしますとキャベツの音っていうものは、私たちはすごい大きいはずのものなんだけど、背景に沈めてしまっているために全然抵抗がない。

そう考えると知覚過敏というふうに簡単に言わない方がいいのではないかと、というふうに僕は思うんですね。そうすると図地分節の共有ができていない、あるいは意味世界を共有できていないがために、ものの正確な刺激の大きさをとらえることができないという現象として考えることも可能なんじゃないか。そういう目でいったん見るべきじゃないかと思っていて、脳のどこかがおかしくなっているので、知覚過敏になっているというふうに言う以前のところで考えるべきだと思ったりしています。

そういうことで、次のところ言葉の形成なんかも、なぜ言葉が身についていくのかと考えますとね、単に中学生が英単語を覚えるみたいにして、Dogは犬だということを対にして覚えているわけじゃないということが当然ながらわかってくる。形成過程を追っかけることで初めて言葉っていうのが私たちにとって何であるのかっていうことが見えてくる。

### <子どもたちの「生きるかたち」>

頭の方はセミナーのメインの企画のものとはほぼ一緒だと思うんですけど、最後を「生きるかたち」というふうにししました。普通あんまりこういう言い方馴染まないかと思うんですけど、私、「生き方」という言い方、あんまりぴったりこ

ないなあってある時から思い出して、子どもたちの生き方、私たちの生き方っていうことでよく言うわけですけども、生き方っていうとね、どうも選べる方が先だっていう気がするんですね。私の生き方はこうだ。いろいろあってこれを選んでるんですけどいうふうに、選べる部分が前面に出るような気がしまして。確かに選べることは大事ですから、生き方を自分で主体的に選ぶということは当然、誰にでも保障されなければいけないことだと思うんですけども、片方で選べないこともあるよなあとということ、もうちょっとちゃんと見といた方がいいのではないかと、思って。

「生きるかたち」と言っているのは、選べる、選べないということを超えて私たちが引き受けざる負えないことがある。先程の話の中でもどうしようもないことがある。誰もが持っているはず。障害とか言わなくて、私たちはこうあればもつといいのになって思うけど、そうないってことがありますよね。例えば、すごい簡単なたとえで、女だったらいいのになあと思うけど、女にはなれないとか。あるいは、もうちょっといいところに生まれたり、もうちょっと気の利いたことも言えるのになあとか、あるじゃないですか。いいとこの坊ちゃんやお嬢さんを見ると、羨ましくなるといことがありますけれども、どうしようもないですよ。障害もそうです。どうしようもあるものもある。どうしようもあることだったら選んで、どうしようもあるほうを選んでやっていけばいいんですけども、どうしようもないことがある。それを私たちが引き受けて、あるかたちを作って生きてるっていうふうに見た方がいいのではないかと、思っていて、あえて「生きるかたち」という言い方をしています。選べなさを認めながら考えていくということが必要じゃないかなあと、思っています。

発達研のメンバーがおるのでしゃべりにくいんですが、最近、外へ出てしゃべる時に、「すごい当たり前の発達の原則を語ります」とかって言って大ぼらを吹いていっていることがあるんですが、当たり前すぎるので「えっ？」って思われるかもしれない。だけど、当たり前すぎることを確認したいと思っています。何かっていうと、人はどんなふうにいるのか。大冗談みたいに振り

かぶって、人はどんなふうにいるのか。答えはあんまり大冗談じゃないんですね。人は身体で生きている。身体で生きる以外にない。当たり前ですよね。身体があるから生きているわけです。身体で生きているとはどういうことかということ、身体があるところで生きている。身体のあるところってどこかということですよ。ここの今自分の身体のあるところで人は生きている。もちろん昨日も生きていました。昨日は自分の身体を置いていた昨日のここの今を生きている。明日もおそらく生きているだろうと思いますよね。だいたい当たるだろうと思いますが、明日も生きているだろう。だけど明日は、明日に自分の身を置くであろう、明日のここの今を生きている。それしかないって思うんですね。

そんなことというと、利根的に生きているんじゃないか、そういうこと言いたいのかと思われるかもしれませんが、残念ながら利根的に生きられません。たった今、ここでこうしていても、昨日あんなことしなけりゃよかったと思いついたり、もうちょっとで終わらないかなあというふうに思ったり、もうちょっとしたら一杯飲めるかなあと思ったりします。人はなんだかんだ言っても、利根的には生きられない。つい明日のことを思ってしまふ。つい昨日のことを思ってしまふ。ですから利根的には生きられないんですけども、生きているのはここの今。ここの今、自分の身体に手持ちにしてる力を使って生きている。当たり前ですよ。自分の身体に今ある力を使って生きる以外にないわけです。

もうちょっと皮肉な言い方をしますと、今日できることが、明日できるようになったかもしれませんがね。私たちはもうほとんどないかもしれませんが、ちっちゃい子だと今日はできないけど、次にはできるようになっているということが、いっぱいあるだろうと思います。今日はできないけど明日、明日っていうのはもちろん比喩で言っていますので、10日先、1月先、半年先、1年先かもしれませんが。その比喩をこめて、明日できるようになることがあるかもしれませんが。だけど、明日できるようになるかもしれない力で今日を生きるわけにはいかない。当たり前ですよ。つまり少なくとも、手持ちの力で生きる以外にないの

ではないか。もうちょっと裏返しますと、今できないことがある。できないことがあったらどうするかといったら、できるようにするというのが学校の発想ですね。私たちは、そういうふうには馴染んでしまっている。できなければ、できるようにする。だけどできるようにするって、できるようにするまで、できやしないわけです。できやしない今どうするかと言っているわけです。できやしない今どうするかと言ったら、できないことは適当にやりくりして生きています。そんな生き方しかできやしないということなんです。当たり前のことです。人は手持ちの力を使って今を生き、できなさは適当にやりくりしながら生きている。そうやってやってるうちに次の力が出てくるかもしれない。出てこないこともある。そういうものだと私は思うんですね。

問題は学校の発想だと、どんな力を身につかせたらいいんだろうかと、力を身につける方ばかりいっちゃうんだけど、そうじゃなくて私たちが、今手持ちにしてる力を確認して、この子どもはこんな力を持っているんだなと思えば、持っている力をちゃんと使えるだけの機会や経験を提供しているかどうかだと思うんです。そういう目で見るべきじゃないかということなんです。手持ちの力を使える機会を十分に提供していれば、結果的に次の力は必ず出てくる。それ以外の力のでき方はないと私は思います。だから力を身につけて将来を安定した生き方にしようという善意のありようは、子どもたちに対して、とことん“今はだめなんだ”というメッセージを与え続けることになりかねない。むしろ今の手持ちの力をちゃんと使えて本人が良かったとか、面白かったとか、あるいは自分がやったことで相手が喜んでくれたとかね。

### <相手が喜んでくれたら嬉しい>

実は喜んでもらう体験というのが大事で、子どもたちはみんな自分の力を身につけていくことだけが目標になっているようです。しかし、自分の力が身についたら自分のためになりますが、人間という生き物は非常にけったいな生き物で、自分の力で何かをやって自分のためになったら嬉しい

ということは、もちろんですが、同時に自分の力で何かやって、人が喜んでくれたらうれしいというふうに思う実に不思議な生き物です。他の生き物はちょっと思いつかないわけです。自分の力を使って何かをやって、相手が喜んでくれたら嬉しいというのは、もちろん親鳥は雛に餌を運んでくれますけど、あれは喜んでるからってということじゃないと思うんですね。ある種の本能的なんでしょうと思います。私たち人間は、自分が何かやったことで相手が喜んでくれると嬉しいって生き物なんです。

褒めるって話が出ましたけれども、褒めるというよりは喜ぶ方が大事なんじゃないかなって思うんですね。周りの人がね。子どもが何かやってくれて嬉しいなあとか、びっくりしたなあとか、そのことが僕は非常に大事なんじゃないかと思っています。褒めるというと、ここを褒めてあげようみたいなことがどっかにあって、それにうまいこといったら、あるいはそこまでいなくても褒め殺しをするみたいな話になってしまうところがあって、ちょっとせこいかなという、手段として使ってもいいんですけど、ほんとのところはやっぱり、周りがそのことで嬉しいというのが大事だと思うんですね。

例えば、お母さんが病気で倒れて、いつも食事の用意はお母さんがやる。だけどお父さんもいなくてどうしようもない時に、年長さんくらいの子供でも何とかしないといけないと思う。なんとかしようとする。おにぎりを作ろうとしたり、お粥さんっていうものを覚えていけばお粥さんをお母さんに聞きながら作ろうとしたりして、曲がりなりにも出来て、お母さんところに持って行って、一口食べておいしいと言ってくれたら、それが嬉しい。相手が喜んでくれるのが嬉しいという感覚は、ちっちゃい時からあるんですね。子どもがもっと自分より小さい子と遊んで相手を喜ばせるというのは大好きですよ。そういうことをもっと考えてもいいんじゃないかなあ。自分の力を使って自分のためになるだけじゃなくて、人を喜ばせるっていうことを。今日、話題になっている子どもたちも褒めてはもらえるけれど、喜んでもらえるっていうのは少ないのかなあって気がしてしょうがないんですね。そのへんのところを私たちは、も

う少し考えていく必要があるかなあっていう気がしています。

私たちは誰もがどうしようもなさを抱えています。どうしようもなさを抱えながら生きていく、そのへんを私たちももっと積極的に見ていかないといけないなと思います。

### <できなさを引き受けて一緒に生きる>

最後にこの話をしているといつも思いだすんですけども、重い自閉症の親御さんで、1960年代に生まれたお子さんでしたので、まだ自閉症っていうものが珍しかった頃です。ほとんど自閉症なんか聞いたこともないという中で、学校に入るときも自閉症なんて誰も知りませんでしたので、そのままずっと入っちゃって、お母さんいわく「今だったら入れなかったでしょうね。もぐりで入りました。うちの子は。」とかって言っていましたけれども。

いわゆる今でいう特別支援学級なんかにも入らないで、小学校、中学校とやってきて、高校年代は近くの地域の高等学校のサークルで課外活動だけで参加するというかたちでやってました。そのお母さんが、お子さんが同じ自閉症ということで付き合いがあった方がいらっちゃって、その人は自閉症親の会で出てこられて、そのお子さんもずいぶん重い（自閉症の）お子さんで、日本で自閉症の第何例というくらいの早い時期のお子さんでした。そのお母さんと知り合って、しばらくしてから言われた言葉がすごいやっぱりショッキングで、いつも思い出すんですけど、何かっていうと、そのお母さんも小学校、中学校と普通校でやってきた。学校で結構問題行動があって自傷行為、他害行為もあって大変に苦労したはずなんです。そのお母さんが、その子が二十歳くらいになってからの話なんですけれども、「自閉症は治ってもらったら困る」というのをおっしゃったんです。自閉症が治ってもらったら困るというふうに聞きますと「えっ？」って思いますよね。どういうことなんだろうという、聞くときよくわかる。

何かとていうと、一つはですね、自閉症は、こういう療法をやれば治るんだみたいなことを盛んに言うことがありますよね。一時は薬物療法で治る

なんてことが、新聞で報道されたりしました。厚生省の薬物研究班が新薬を開発したということで、新聞のトップの記事に載ったりしたものですから、その研究班のところに所属している医者の方で勤めている病院に列ができる。うちの子に試してほしいというふうに。そういうかたちで病院ショッピングみたいなことを言われますけれども、ほんとに親御さんたちが必死の思いで振り回されている。その姿を見るつど嫌だなと思う。

もう一つが、この方が根本的な話です。何かというと、風邪が治るみたいに当然治るなら治った方がいいわけです。楽ですから。早く治してほしい。人間ってきわめて複雑な生き物で、風邪が治るみたいに簡単に治るものじゃないってことはよくわかった。つくづく、子どもと付き合ってみて、風邪が治るみたいに簡単に治る、そんなものじゃない。そうだとすると、その上で、なおかつ治る、治るという思いでその子どもと暮らすということは、治っていない、現にしんどい思いをまだしているその子どもを否定しているに等しいんじゃないか。治るという思いで、治るというイメージでその子どもに関わるということは、現に目の前にいる今のこの子を否定しているに等しいんじゃないか。自閉症が治ってもらったら困るとお母さんがおっしゃるのは、この子のままで私は引き受けて一緒に生きていきますということを、

積極的な意味合いをこめて言っているということだと思います。人間にはどうしようもなさがあります。

それはもちろん自閉症が治るのであれば、風邪薬を飲んだら治るみたいに、治るのであれば、僕だって治ることを否定はしません。けどそんな単純じゃないことはよくわかってるわけです。できなさを引き受けて一緒にやりましょうっていうのが基本じゃないかと思うんです。治る、治るというイメージで関わることのいびつさみたいなことを、私たちはもう一度考え直す必要があるんじゃないかと思います。

そういうことも含めて、「生きるかたち」を私たちが共にどう考えたらいいのかっていうことが、本来の特別支援教育のありようかなあと思うんです。私の話はいつも暗いんで、「そんな暗いことばかり言ってどうするんですか！」って言われるんですけども、明かりをつけようと思うからには、暗さを確認しとかなないといけない。暗いと思うから明かりをつけようという気になるわけであって、暗さをしっかり見つめるっていうことが、とりあえず大事なあということ、終わりの言葉にしたいと思います。どうもご静聴ありがとうございます。

※文責 障害児教育実践センター専任  
浦崎 武